大久保　巌（おおくぼ・がん）

1、プロフィール

　角川賞受賞作家の米田一穂に師事。俳人協会青森県支部創刊に参画。
　上十三地区、十和田市の俳句振興に尽くした。農民俳句として名を馳せた。
＜生没＞
　1928（昭和 3）年 1 月 16 日　～　1993（平成 5）年 2 月 5 日
＜代表作＞
　塩も負ひ夏痩の父牛曳き来
　夜も稼ぐ野鍛冶蠅糞まみれの灯
　薫風や父が綴れる農民史
　継多き風呂敷包む茄子トマト
　乳穂の蓋かぶせ終ればすでに月

＜青森との関わり＞
　青森県俳句懇話会十和田大会に尽力した。

2、作家解説

　本名、巌（いわお）。三本木町（現十和田市）生まれ。県立三本木農学校卒。青森県共済生活協同組合上北支部長を務め、父祖伝来の農業に従事。

　句歴
　1949（昭和 24）年、胸を患い、国立療養所において仲間に誘われ作句を始める。
　1957（昭和 32）年、火山群俳句会に参加、米田一穂の指導を受ける。
　1968（昭和 43）年、俳誌「萬緑」会員。俳誌「薫風」創刊同人、初代同人会長。俳人協会員。

1974(昭和 49)年、青森県俳句懇話会委員。
1978(昭和 53)年、俳誌「北鈴」北鈴賞受賞。十和田市文化協会副会長。
俳人協会青森県支部副支部長。
1982(昭和 57)年、俳人協会青森県支部結成準備会(発起人 10 人の中の
ひとり)幹事。
1983(昭和 58)年、句集『乳穂の蓋』(社団法人俳人協会、10 月 25 日)発行。
1984(昭和 59)年、十和田市文化奨励賞。火山群俳句会会長。
1993(平成 5)年、十和田市文化功労賞。